

視覚障害生徒の日常生活動作の再指導方法についての提案（1）

発達順序性の項目ネットワーク図・下位項目表の活用

左振恵子

（帝京平成大学）

視覚障害 日常生活動作 ADL

（目的）

見えない・見えづらいという視覚障害を有する生徒の日常生活動作は、幼稚園段階では日常生活動作そのものや遊びを通して動作の習得を目指し、続いて小学部段階でも必要な指導は続き、中学部以上でも指導は継続する。しかし、中学部以上で行う指導は、生徒の将来の社会生活を見据えて行うため、幼稚園や小学部段階で習得してきた動作の再指導が必要となる場合がある。

視覚障害生徒は、その障害故に動作習得のための練習を繰り返し行っても、動作の習得が難しい場合が多々ある。生徒の苦手な動作を指導する際に、その動作そのものを指導するのではなく、発達順序性の項目ネットワーク図から習得すべき動作の下位の動作を見つけ、下位動作を習得させてから、当該動作の指導に戻る方が、より動作の習得がし易くなり、効果的な指導になるのではないかと考えた。

本研究は、最終的な目的を「視覚障害生徒への日常生活動作の効果的な再指導を行うための指導内容を提案すること」とした。そのために「晴眼幼児における手指動作を中心とする日常生活動作の発達順序性」を調べ、項目ネットワークを作成した。本発表では、「作成した発達順序性の項目ネットワークを参考に、視覚障害生徒への日常生活動作の再指導を行うための指導内容の提案例を示すこと」とする。

（方法）

（1）項目ネットワークの作成

対象：神奈川県内の園 I 幼稚園の 3 歳～6 歳の園児の保護者

手続き：20XX 年 6 月に 3 歳～6 歳の園児の保護者にアンケート用紙を配布した。アンケート内容は、手指動作を中心とした日常生活動作を 90 項目提示し、各項目の動作についての子どもの習得状況について、○か×をつけていただいた。

アンケート内容：提示した 90 項目は、4 個の大項目と 23 個の中項目の構成とした。

食事（スプーン・箸・こぼさない・紙パック飲料）、衣類（着脱・ボタン・スナップ・ファスナー・靴下・靴・紐）、衛生（手洗い、うがい・歯みがき・入浴）、手指運動（持つ、握る・ちぎる、切る・折る・たたむ・開ける）

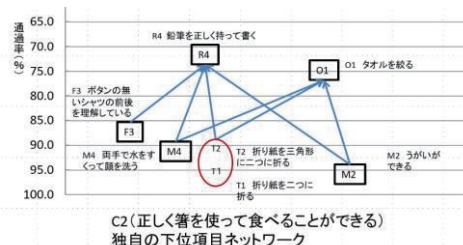
分析方法：項目ネットワーク作成のために、以下の手順で、項目間の順序性を判定した。

- ①アンケートの回答の内容の表を作成。
- ②項目ごとの得点を算出し、通過率を算出。
- ③Airasian の判定基準で、2 項目間の順序性の有無を判定。
- ④マトリクスを作成。
- ⑤項目ネットワークを作成。

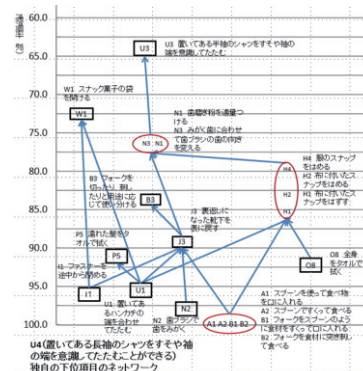
（2）指導内容の提案例

中学部の生徒から要望の多い二つの動作（C2 正しく箸を使って食べることができる、U4 置いてある長袖のシャツをすそや袖の端を意識してたたむ）についての発達順序性の項目ネットワークを作成した。

（結果）



【図 2 C2 独自の下位項目のネットワーク】



【図 3 U4 独自の下位項目のネットワーク】

（考察）

作成した発達順序性の項目ネットワークを参考に以下のような再指導のための提案内容を考えた。

○C2（正しく箸を使って食べることができる）

- ・箸の持ち方が緩い場合：指の力を強くする作業として【タオルやぞうきんを絞る】
- ・指が独立して動かない場合：中心となる三指の動きの強化として【紙を折る】
- ・口元に上手く箸が運べない場合：手と顔の距離感を図る動作として【両手で水をすくって飲む・洗顔する】
- U4（置いてある長袖のシャツをすそや袖の端を意識してたたむ）
- ・脇線への折り返しが上手くできない場合：方向性を考える動作として【スナック菓子の袋のように方向性を意識して引っ張る手作業（スナップやマジックテープなど）】
- ・布を折って重ねる時に上手くできない（勢いよく重ねるのでしわが寄る）場合：力加減を調整する作業として【フォークを切ったりさしたりと用途に応じて使い分ける、水加減を調整して手を洗うなど】

今後は、提案する動作を増やすと共に提案内容の検証を行っていく。

（文献）

三宅信一・清水貞夫・及川克紀（1984）：Ordering theory の諸手法の比較—データにおける順序性判定基準の検討—。電子通信学会教育技術研究報告 ET83-10, 45-48。

本研究は修士論文として行い、聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理委員会に申請書を提出し、承認を得たものである。

（SABURI Keiko）